

國學院大學学術情報リポジトリ

日本民俗学が論じた沖縄：
一九七〇年代前後の反省の文脈を中心に：
特集日本民俗学の展望を拓く：
伝承文学専攻開設二十五周年記念

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 武井, 基晃, Takei, Motohiro メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000264

日本民俗学が論じた沖縄

— 一九七〇年代前後の反省の文脈を中心に —

武井基晃

一、はじめに

日本民俗学が沖縄をどう調査し、そして論じてきたかが本稿で筆者に課された課題であるが、それは非常に大きな問題である。柳田国男・折口信夫¹⁾によって沖縄（琉球・南島）が民俗学という学問にとって重要な位置を占めて以来の学史上の位置づけはまた筆者の手に余るものであるが、この場を借りて筆者の関心に沿って日本民俗学における沖縄の論じられ方、描かれ方について論じてみたい。まず、その導入として最近のものを中

心に、日本民俗学の概説書・入門書類が斯学の射程を描くに当たって、沖縄をどのように位置づけているかを確認する。

続いて1つの軸として、戦後から沖縄の本土復帰（一九七二年五月）の前後までにしほって、『日本民俗学会報』・『日本民俗学』に掲載された記事から、当時における日本民俗学と沖縄の関係という学史の1場面を提示したい。なお当時は社会人類学者による親族調査・研究の成果も多く出されていた時代であることは承知しているが、今回は日本民俗学として提示された当時の成果にしほり込むこととする。

さらに、学史を整理する視角として本稿では、当時の日本民

俗学における「反省」の文脈を視野の中心に据える。先行研究の引用から本稿が着目する反省とは、沖縄研究のあり方への反省であり、民俗（フォークロア）の調査への反省である。自己内省を標榜する日本民俗学とは言え、沖縄をめぐってかようなまでに多様な反省をうながされてきたかに改めて気づかされる。それは決して学史上のことだけでなく、筆者をはじめ今日の沖縄の調査・研究にも突き刺さってくるものである。

二、日本民俗学の概説書における沖縄

日本民俗学の概説書・入門書では、沖縄をどのように位置づけてきただろうか。手始めに『日本民俗学概論』から見てみると、Ⅰ空間の民俗、Ⅱ時間の民俗、Ⅲ心意の民俗を経た後で、Ⅳ特論の中に「23 沖縄の民俗」「大本 一九八三」がある（特論はこのほか「21 過疎と民俗の変貌」「22 都市の民俗」「24 民俗の調査と記録」「25 民俗学研究法」）。その冒頭では「民俗資料にもとづいて、この沖縄文化としての一貫性を認識し、本土文化との連関または対比のあり方を、時間的な変化と空間的な変差を考慮した上で、比較分析していくことが日本民俗学の一つの課題である」「同 二四五頁」と指摘され、また村落につい

ては「たとえば近世以降五人組制度が施行されなかったように、本土村落と同一過程をたどっているのではない。そうした事情からか、日本民俗学による調査研究は進展しておらず、現状では全域的な性格はとらえ難い」「同 二四七頁」としつつ、一方で家族や村落構造について西南日本型に通じる部分を特に取り上げて論じられている「同 二四六―二四八頁」。そして絶え間ない政情の変動の中で激しい変化が起きてきたことにふれ「日本民俗学は、沖縄の民俗研究に関してばかりとはいえないが、現実の民俗や社会・文化の変化に対応しうるだけの観点や方法論の検討を怠ってきた」「同 二五二頁」と、沖縄だけでなく日本民俗学全体の課題を指摘して締めくくられている。

では最近の概説書・入門書を見てみよう。まず『民俗学講義―生活文化へのアプローチ』では最後に「補章 北海道民俗・沖縄民俗の特徴」「舟山・塩月 二〇〇六」が設けられている（同書で補章はこの章のみ）。北海道と沖縄それぞれの担当の連名で沖縄は二頁だけである。紙幅の都合か、オナリ・御嶽・門中をはじめ基本的な用語の羅列にとどまっている。

『図説日本民俗学』も「特論 南島」「古家 二〇〇九」が最後に設けられている（同書で特論はこの章のみ）。同書はヒト・イエ・ムラ・カミの4部構成で日本の民俗を提示するが、その

後ろに設けられたこの「特論 南島」もヒト・イエ・ムラ・カミという同じ構成からなり、それら全てについて南島の民俗を提示している。南島に対する取り扱い上の意図、位置づけ上の難しさが読み取れよう。

『図解案内日本の民俗』も最後に「IV沖縄」の章がある「福田他編 二〇一二」。冒頭で「日本列島の民俗事象を一四五項目に分け、Ⅰなりわいと仕事、Ⅱ地域と生活、Ⅲ行事と儀礼、IV沖縄に編成した」〔同 六頁〕と説明され、「IV沖縄」の内部は同書のそれまでの構成と対応するように、一 暮らしと生業、二 村落と家族・親族、三 行事と儀礼にわかれ、四 信仰が付け加えられている。つまり『図説日本民俗学』と同様に日本列島を描いてから、沖縄だけの章を設けて沖縄を描いている。

以上のように、沖縄・南島は巻末のほうで論じられることが多い。そうした中、やや異なる展開なのが『はじめて学ぶ民俗学』〔市川他編 二〇一五〕である。同書は「大学生のアイ」の大学生活の出来事を通して民俗学を描くのだが、冒頭（入学式）からさっそく沖縄出身の男子学生と出会い、第1章（身体を装う）から南西諸島のハジチ（入墨）が紹介される。そして第2章（自分を振り返る）で早々と沖縄に降り立ち、第3章（知らない世界に出会う）まで沖縄の民俗さらには移民が論じられ

ている。しかし、これもある意味で特別扱いだろう。東京で生まれ育ち都内の大学に通うと設定された主人公が自分にとっての当たり前を問い直す強烈なきっかけとして真っ先に描かれたのが、入学早々の沖縄との出会いだったわけである。

日本民俗学の主な概説書・入門書にとって沖縄・南島とは重要な対象であるものの、置き所が悩ましいものである。

三、『日本民俗学会報』・『日本民俗学』掲載記事と 沖縄

戦後の日本民俗学の学術研究において沖縄・南島はどのように扱われてきたのか。『日本民俗学会報』（一九五八年七月の1号～一九六九年十一月の66号）と、『日本民俗学』（一九七〇年一月の67号～一九七五年八月の100号）に掲載された、沖縄についての論説・報告など（奄美諸島のものもあるが今回は割愛する）を見てみると、一九五九年（第5号）以降の十七年間で、沖縄を主題とした論説・報告がないのは一九六四年・一九六九年・一九七三年・一九七四年だけで、その四年間をのぞいてほぼ毎年何らかの沖縄についての記事が載っている（表参照）。ただしその間の日本民俗学は沖縄研究に寄与してきたかとい

うと、そう簡単に言えるものではなく、その寄与が事例の蓄積という方面はともかく、はたして学問の対象としてどれほど沖縄とその文化を論じ得たかについては、当時から民俗学の内外から問われ、多くの批判が寄せられてきた。それは沖縄を対象とした論考ばかりではなく、日本民俗学の研究全体のあり方に寄せられたものであった。先に近年の概説書における沖縄の取り扱いを概観したが、沖縄を通じて日本民俗学の課題を論じたのは『日本民俗学概論』（一九八三年）くらいで近年の概説書は、ページを割いて掲載しつつもその位置づけを論じ切れていない。こうしたことは強く反省しなければならないだろう。

そこで以下では「反省」をキーワードに設定して、戦後から沖縄復帰前後の日本民俗学における沖縄・南島研究について学史的に論じてみたい。

四、反省の文脈①——柳田国男らに続くこととする立場——

一九六〇年代当時の民俗学の沖縄調査・研究には、柳田国男をはじめとする先学の成果を高く評価し、それに応えて続くこととする立場がある。当時の反省の文脈とは、いかに柳田ら先学に続き発展できるかであった。

大藤時彦（一九〇二年生）は、伊波普猷（をなり神、ニライカナイなど）、柳田国男（『海南小記』『海上の道』など）、折口信夫（遙拝、石の神性、火の神への着目など）の成果を端的にまとめた上で、「柳田、伊波、折口などの研究をわれわれはどのように承継し、どのような方法をもって発展せしむべきであろうか」、「学界全体の問題として咀嚼されつくしていない」「大藤 一九六五 十九頁」と、先学を強く意識して、日本民俗学の沖縄研究の発展について反省と課題を述べている。

これとほぼ同時期、村武精一（一九二八年生）は、柳田の民俗学の学説の有効性を説くに当たって、当時の沖縄の族制研究の成果を挙げて論じている。村武は「日本民俗学方法論上の最大の欠点として、しばしば、『構造分析』の欠如」が指摘され「資料採集とその羅列のみに終始していると批判」されることに對して疑義を唱える立場から、「日本民俗学における従来の族制研究の方法は、まず、民俗としての族縁用語を徹底的に採集し、その方言学的な分析と現行の慣行内容を明らかにするとともに、その変遷を様々な方法であとづけてゆく」（村武 一九六七 二頁）ものであると主張している。そして「伝統的なこの方法が、これからも有効かつ重要なアプローチであること」「同」を示す事例として、柳田によるオヤコ（族長と族人

というタテ関係」で、始祖との系譜関係を前提とする族縁」と、イトコ（「族人間のヨコ関係」で、両親との関係による第一イトコ・兄弟姉妹という横の広がりの族縁」という概念および分析視角・方法が「琉球・奄美の民俗社会にも可能」（オヤコ＝ピキ系、イトコ＝ファロウジ・ウェーカー・ウトウンザ系の語と概念が照応）だったことを主張「同 六頁」し、その上で柳田の族制研究を「現実の具体的な諸形態のなかにひそんでいる、かくされている意味ないしは原理を抽出し、社会・文化の全体的理解にせまろうとされる方法」【同 八頁】と評し結んでいる。

また日本民俗学と沖縄研究との関係について大藤は、近代初頭までの沖縄の民俗への関心はまだ「本土のものと比較して民俗学的に研究するということはなかった」のだが、柳田国男以降に「沖縄の民俗研究も趣味的なものから脱して純粋な学的見地」に立つようになったとし、柳田監修の『炉辺叢書』にも多く収録された沖縄の書物（伊波普猷『古琉球の政治』、東恩納寛惇『琉球人名考』、佐喜真興英『シマの話』、『南島説話』、喜舎場永珣『八重山島民謡誌』、宮良当壮『沖縄の人形芝居』、島袋源七『山原の土俗』、本山桂川『与那原島図誌』）を「全国各地の民俗資料を採集することに努力し、地方の研究が郷土人によって行われ、郷土の民俗を調査報告することを奨励した」一

例として位置づけている「大藤 一九六五 六頁」。

しかし同じ時期に、沖縄出身の研究者である饒平名健爾（一九三〇年生）は「日本民俗学は地方の研究者達の研究方法に対する十分な指導若しくは考慮がなされてきたとは必ずしも云えない」【饒平名 一九七五（一九六八初出） 二四八頁】と断じている。この饒平名の指摘について、のちに野口武徳（一九三三年生）は、饒平名が「柳田民俗学が沖縄で果たした成果や役割を高く評価するとともに、現在の水準から見た場合の問題点を、とくに沖縄の郷土研究者（ほとんどは柳田民俗学の信奉者）」と郷土研究にしぼって論じている【「野口 一九七五 二八一頁」と解説している】。

五、反省の文脈②―戦後から復帰前後の沖縄への関心―

野口はさらに、饒平名の指摘を振り返って、「本土からの研究者に対して、警告」【野口 一九七五 二八〇頁】、「復帰後、一段と増えた沖縄研究への慎重さを促す意味で好論」【同 二八一頁】と受け止め、さらに「沖縄の状況はまた本土の状況でもあるのだと考え、反省の材料にすべき」【同。傍点筆者、

以下略」であるとする。また野口は民俗調査の対象地域として「戦前の柳田・折口をはじめとし、沖縄出身者の郷土研究としても、日本でもっとも盛んであった地方であった」という沖縄において、「何か沖縄について書いたり、話したりすれば衆目を多く集めるという時期」があったため、戦後急速に調査者が増加した「同 二八〇頁」ことを認め、そして「その調査研究が、一部の人をのぞいて、安易に墮す傾向があったこともまた否めない」状況だったことを、野口は「深く反省」している「同」。

復帰直前の沖縄について、九学会連合による沖縄の総合調査の前年度に、和歌森太郎（一九一五年生）は次のように述べた。「沖縄の本土復帰の日が近づいて来るにしたがって、本土の学者たちの沖縄への学術的関心が著しく強まって来た。人文・社会科学のさまざまな分野で、沖縄の実地調査を試みるものが、このところだいぶ目立つ」〔和歌森 一九七〇 七二頁〕。

その当時の状況を渡辺欣雄（一九四七年生）は「沖縄研究を志す者の大部分が経験していると思われる調査地での研究者の溢乱は、何を意味するものであろうか。そして九学会連合を母体として沖縄共同調査の機会を得て出された「沖縄研究文献・資料目録抄」にみる文献の溢乱は、何を意味するのであろうか」とその多さを「溢乱」と表現し、その意味を「一つには沖縄研

究の個性記述的分析の段階から、法則定位的分析の段階への研究の進化の必要性」に求めた〔渡辺 一九七一 一〇頁〕。

しかしその実、当時の状況は、和歌森によると「沖縄にこそ日本民族文化の原質というか、核があるのだというイメージ」に従って、それが米軍支配下で「急速に衰滅しようとしている」ことへの「焦慮にかられた学者たちは、沖縄での古代の痕跡を、このさい自らの眼でたしかめておこうと、踏査を急ぐに至った」〔和歌森 七三頁〕ものにすぎず、それが沖縄県民の期待、すなわち「尚古趣味にかりたてられて、この島々に来られても迷惑だ。きびしい国際関係下に変則な位置づけを強いられている現実を、どのようにして正常にもどすことができるのか。その方法を学問的に導いてくれる学者たちの渡来ならば歓迎できる」と合致していないことを自覚していた「同」。そして「私たちの沖縄をふくめての南島民俗の調査は、古いしきたり、伝承を調べつつ、常に七〇年代の沖縄の前途を案じるという態度を堅持したい」〔同 七五頁〕と、調査時点から発した問題の解決を企図している。

六、反省の文脈③——沖繩の特異性の強調——

そもそも沖繩を日本列島内という日本民俗学の射程とした上で、ひるがえって沖繩の特異性を際立たせる傾向があった。饒平名は復帰以前から「民俗の地域性の問題として沖繩が特異な伝承を保存しているということのみに囚われているとすれば、われわれはそれこそ警戒しなければならない。(中略)沖繩の民俗伝承が特異なものであると断定する前に、内容の類似した民俗が地域を越えて存在することが多いことを知らねばならない」〔饒平名 一九七五(一九六八初出) 二五二頁〕、「沖繩を民俗の宝庫であるという諸学者の注目をうけとめ、その社会の背後に横たわる諸原理をつかむためには、やはり幾度となく方法が論じられ、沖繩民俗の特質や様相が論じられなくてはならないし、その土台をなす正しい民俗誌の記述は今後ますますめられなければならない」〔同 一五六頁〕と論じている。

また野口は「沖繩の社会と文化が、あまりにも本土一般とはかけはなれていて、従来の民俗学の調査方法や論理のフレームではとらえきれないところが多かった」、「今まで民俗学で用意・整理されてきた質問項目などでは、役に立たない部分がむしろ

多かった」〔野口 一九七五 二八〇頁〕と述懐している。

山下欣一(一九二九年生)も多くの反省・課題を指摘しているので引用したい。「民俗資料の宝庫であり、さらにはエスノロジーへの橋渡しになる立場に南島はあると言われていますね。それは東南アジアとの関係もあるし、日本本土との関係もあり、中国との関係もある。南島のフォークロアが客体化する資料は単なる資料でなくて、比較研究をしなければならないという視点が、いままです南島に集中され過ぎた気がします。当然学問的な一つの立場でしょう。また反省しなければならぬことは、南島は日本との同一文化であるという視点からするアプローチ。次には南島の異文化だけを注目する研究者も出てきているわけですね。また、周辺諸民族との比較研究を主題にするという立場もあるわけです」〔山下 一九八四 一九五頁〕。

七、反省の文脈④——門中への過度な関心の集中——

当時の沖繩の民俗調査は御嶽祭祀や女性による祭祀などを注視し、日本本土との比較が計られたが、門中には特に過度な関心が集中した。そのことへの疑問は、一九六〇年代の半ばからもう提示されていた。たとえば大藤は当時すでに「究明が多く

の学者の間に関心の的とせらるるにいたった」「大藤

一九六五 二〇頁」という門中組織については「現在見られる形は沖縄本島において特殊に発達したもので、最初からの形ではなかったのではないかという疑問」を呈した。そして「門中」ということをいわない島もあるので、やはり門中の研究は沖縄全島の族制を精査したのちにその変遷のあとを追ってみる必要がある」「同 一二頁」と、課題としている。

小川徹（一九一四年生）も「南西諸島といえ、門中制度の社会であり、明らかに中国大陸と型式上つながりのある清明の慣行や門中亀甲墓をシンボルとするものと観念され、従って大陸文化との連繫を説こうとする性急な試みも生れてきている」ものの、「しかし、いったい門中制度やそのシンボルの古さはどうであるのか、それは無前提に本源的なものとみなされてよいものであるか」「小川 一九六六 一一六頁」と指摘し、親族関係の称呼の分布の分析や史料・調査成果から、村落社会の父系的親族集団―当時「門中化」として論じられたもの―がたとえ門中と呼ばれたとしても「門中なる称呼は単なる借用にすぎないと認めて差支えない」とし、さらに「門中制度の歴史性への理解がなお十分には普遍化していない現状において、門中もまた歴史的所産であり、時代性を反映した存在である」と

論じた「同 一一九頁」。

また同様に和歌森は、選挙運動に絡めつつ沖縄の門中について次のように指摘している。「門中」派閥的にそれぞれ地盤を固める傾向を示していると伝えられる。はたしてそうか。沖縄といえ、門中」とすぐに念頭に浮かべるのが一般であるが、一般民衆のあいだに、それは牢固たる共同結束の仕組みにやほりなってきたのか。いとすれば、何がそれを支えてきたのか」「和歌森 一九七〇 七四頁」、「門中」による祖孫の一体的感覚が、仮に今日も普遍的だとするならば―私自身の調べではこれまでのところ、そう久しい普遍性をもっていないと認めているが―そのことと、御嶽などの聖林を中心にする信仰や葬送儀礼とは、どうかかわるか」「同 七五頁」。

八、反省の文脈⑤―短期間の調査の横行―

ここまで何度か引用してきた饒平名の指摘は、沖縄を対象とした民俗調査の実態を省みると同時に、民俗の調査全般に対して示唆に富む論考である。例えば「信憑性のある記述とは、その当該地域の人々に共感と共鳴を得て自分達をして語らしめるようになったときにうまれる」「饒平名 一九七五（一九六八

初出) 二五〇頁)、「民俗調査は興味中心の調査でなく、またつくられた物語りの記述をすることでもない。社会における正確な事実を求めることが要件の第一である」〔同 二五四頁〕といった興味深い指摘が挙げられる。

このように調査の本質的なあり方を論じた饒平名が、沖縄の民俗の調査に対して「調査は時間をかけたintensiveで、参加観察とそれに基づいた記述や比較、分析でなければならぬ。短期間の皮相な観察に基づいた記述が民俗事象を的確に把握し得ないうらみがでてくることは言うまでもない」〔饒平名一九七五(一九六八初出) 二四九頁〕と断じている。

実際に後者のような調査が横行していたようで、本土からの研究者の調査について野口も「従来の日本民俗学で多くとられた、個別テーマの一つを、短時間に、駆け歩くというイクステンシブな方法での調査をなされた方々にとっては、その衝撃は大きかった」〔野口 一九七五 二八〇頁〕と回想する。

九、反省の文脈⑥—沖縄人自身による研究の提案—

そうした野口だが、「時間がたち、知識が深まれば深まるほど、論文が書けなくなる、とくに沖縄全体のことについては何も論

じられなくなるという、自己の体験」〔野口 一九七五二八一頁〕に基づいて、反省と提案を発表している。

「私の沖縄調査の反省から」という副題の論考〔野口一九七二〕で「研究のためというようないいかげんな態度のまま、さしたる反省もなく、甘ったるい研究や調査を行ってきた」〔同 三五五頁〕と冒頭から省みる野口が「誤解やミスが本土学者の南島調査にとくに多い」〔同 三六一頁〕ことの理由を問いつつ論じたのは、同時代の、そして後年の研究者に對する次のような反省点の指摘である。すなわち、「あわただしい調査」、「現地住民とのかかわりあい方の問題」、「話者の固定化の問題」、「言語理解の不足の問題」であり、「思いあがった、甘ったれた調査態度」、「発表を急ぐせつかさ」などであった。「調査や研究の方法に對する反省が十分になされぬままに発表に持ち込めるチャンスも多かった」〔同 三六一頁〕ことを断じ「とくに社会構造の研究者は、短時日のせつかさな調査」に依拠した「発表だけは避けるべき」と求める〔同 三六五頁〕。

その上で、「日本民俗学のあり方に理想的に参加しうるためにどんな方法がこんご課題とされるか。これはもう既製の研究者では絶望的」だとし、「沖縄人による沖縄の民俗調査を提唱」〔同 三六九頁〕した。そして「沖縄の若い民俗学を志す方々

に」対して「甘ったれた、調査をしてやるといった姿勢の一部本土学者に反省をうながす」仕事を望んでいる。

十、おわりに

以上、一九七〇年代前後の先行研究の引用から、反省の文脈をいくつか導き出してみた。それらは、柳田国男らに続くこうとする立場からいかにそれを発展させるかという反省であり、一方でその立場の地方への考慮の不足を断ずるものでもあった。

また戦後から復帰前後の沖縄への関心が安易に墮したことを反省し、調査時点から発した問題解決の企図を表明するものだった。沖縄の特異性の強調をめぐるはそのみに囚われるべきではないと自戒された。中でも、門中への過度な関心の集中に対しては当時から慎重な見直しの姿勢がくり返し提示されていた。さらに当時の一部研究者による短期間の調査の横行など多くの反省点を指摘した上で、沖縄人自身による研究の提案が本土の研究者に反省をうながすために望まれていた。

今日の研究も、これらのかつての反省の文脈に続いてしかるべきはずだが、かつての反省が忘れ去られ、今日も繰り返されている。本稿では今後の展望の提案にまでは至れなかったので

課題としたい。

とはいえ、少しだけ発言するならば、たとえ調査・研究の端緒は沖縄・南島の民俗や歴史に対する単純かつ純粋な興味だったとしても、そのまま終わることなく、そこから何を知り、何を論じるかを自問するべきであると考え、それを続けているつもりである。そのための基本的な態度を一点挙げるならば、筆者は本土出身で沖縄の研究を志すものとして、関心の共有の必要性を強く意識しており、沖縄で出会った方々が関心を寄せて知ろうとしていること、伝え残そうとしていることを共に探求したいという態度を取るべきであると考えている。そもそも筆者が沖縄の調査を始めたきっかけは、字誌や門中誌など当地の人々が自分自身に直接関係する歴史へと強い関心を寄せ、それを自らの手で表象する伝承行為を調査するためであった。沖縄の人々との関心の共有は、調査者・研究者の独りよがりを防ぐ予防線になると考えている。

参考文献

- 市川秀之・中野紀和・篠原徹・常光徹・福田アジオ編 二〇一五『はじめて学ぶ民俗学』ミネルヴァ書房
大藤時彦 一九六五「日本民俗学における沖縄研究史」とくに柳田国男の位置づけと展望」『東京都立大学南西諸島研究委員会編『沖縄の社会と

宗教」平凡社

大本憲夫 一九八三「沖縄の民俗」福田アジオ・宮田登編『日本民俗学概論』

吉川弘文館

小川徹 一九六六「わが国社会・文化現象の地理的研究について―方法論的一反省―」『人文地理』18―2

野口武徳 一九七二「沖縄人による沖縄研究の提案―私の沖縄調査の反省から―」谷川健一編『叢書わが沖縄第五巻 沖縄学の課題』木耳社

野口武徳 一九七五「解説 民俗調査法」野口武徳・宮田登・福田アジオ編『現代日本民俗学Ⅱ 概念と方法』三一書房

福田アジオ 二〇〇九『日本の民俗学「野」の学問の二〇〇年』吉川弘文館

福田アジオ・内山大介・小林光一郎・鈴木英恵・萩谷良太・吉村風編

二〇一二『図解案内日本の民俗』吉川弘文館

舟山直治・塩月亮子 二〇〇六「北海道民俗・沖縄民俗の特徴」谷口貢・

松崎憲三編『民俗学講義―生活文化へのアプローチ―』八千代出版

古家信平 二〇〇九「特論 南島」福田アジオ・古家信平・上野和男・倉

石忠彦・高桑守史編『図説日本民俗学』吉川弘文館

村武精一 一九六七「日・琉族制研究における構造論―柳田民俗学と社会

人類学―」『日本民俗学会報』54

山下欣一 一九八四「南島研究の現在」谷川健一・山下欣一・荒木博之・

波平恵美子「共同討議 南島のフォークロア」青土社

湯川洋司・古家信平・安室知編 二〇〇九『日本の民俗13 民俗と民俗学』

吉川弘文館

饒平名健爾 一九七五（初出は一九六八）「沖縄の民俗調査―その若干の考

察―」野口武徳・宮田登・福田アジオ編『現代日本民俗学Ⅱ 概念と方法』

三一書房

和歌森太郎 一九七〇「沖縄民俗研究の問題点」『民俗学評論』5

渡辺欣雄 九七一「沖縄の世界観についての一考察―東村字平良を中心と

して―」『日本民俗学』78

注

(1) 一九二〇年代前半に柳田國男と折口信夫は別々に沖縄を訪れた。そ

して二人とも沖縄に惹きつけられ、沖縄の理解なくしては日本は理解

できないという認識を獲得した。(中略) この二人の先達が沖縄を日

本理解のなかにおいたことで、その後の民俗学研究の道筋を作ったと

いえる(「福田 二〇〇九 九四頁」)。

(2) ただし野口は自身と大胡欽一は「長期滞在のお陰で、方言をほとんど

マスターし得たから良かった」「同」とも述べてもいる。

表 『日本民俗学会報』と『日本民俗学』における沖縄

『日本民俗学会報』 (第66号)	1959年	第5号(2月20日)	本田安次 「石垣島の徳利祭」 内盛唯夫・カツ 「沖縄竹富島の話 (一)」
		第6号(3月30日)	内盛唯夫・カツ 「沖縄竹富島の話 (二)」
	1960年	第12号(6月25日)	瀬川清子 「沖縄の女性」
	1961年	第21号(9月25日)	植松明石 「沖縄伊是名島調査報告 - 祭祀組織をめぐって -」
	1962年	第24号(5月30日)	瀬川清子 「沖縄の婚姻儀礼」 野口武徳 「池間島における婚姻」 植松明石 「先島の御嶽をめぐって」 山城善三 「塩谷海神祭」 鎌田久子 「水納島の年中行事」 小川徹 「南西諸島のキナ地名」 中今信 「民俗と政治 - 宮古と八重山の場合 -」 関敬吾 「海上の道 - その紹介と今後の課題 -」
	1963年	第28号(5月15日)	山城善三 「糸満町の綱引」
	1965年	第39号(5月31日)	比嘉政夫 「村落の祭祀組織とくハラ>の祭祀組織 - 沖縄南部における事例から -」
		第41号(9月30日)	馬淵東一 「波照間島その他の氏子組織」
	1966年	第46号(7月20日)	宮本演彦 「『狩俣の村』補遺 - ウヤガムについて -」
		第48号(11月30日)	野口武徳 「沖縄池間島のタウンカラアグ」
『日本民俗学』 (第67号)	1967年	第50号(4月20日)	牛島巖・野口武徳 「沖縄本島東部島嶼の門中と祭祀組織 - 与那城村宮城島における事例を中心として -」
		第54号(11月25日)	村武精一 「日・琉族制研究における構造論 - 柳田民俗学と社会人類学 -」 山路勝彦 「沖縄・波名喜島の門中についての予備的報告」 野口武徳 「沖縄池間島のお産と初出」
	1968年	第57号(7月30日)	小川徹 「民家型式の系譜 試論」
		第58号(9月25日)	名嘉真宜勝 「沖縄の洗骨習俗 - 分布・呼称・時期について -」
	1970年	第71号(9月10日)	松園万亀雄 「沖縄座間味島の門中組織」 小野重朗 「肉と餅との連続 - 供犠儀礼について -」 高橋春子 「沖縄八重山群島における民俗服飾」
	1971年	第74号(3月10日)	小川徹 「沖縄民俗社会における「門中」(仮説的総括)」 渡邊欣雄 「沖縄北部農村の門中組織 - 大宜味村字田港の事例 -」 平敷令治 「沖縄の葬制について」
		第76号(7月30日)	桜井徳太郎 「ユタの関与する死の儀礼 - 沖縄本島上本部村備瀬の場合 -」
		第78号(12月20日)	鎌田久子 「宮古島諸部落の神役名称」 渡邊欣雄 「沖縄の世界観についての一考察 - 東村字平良を中心として -」 小川徹 「産井の継承 - 北部沖縄の事例から -」 山路勝彦 「<門中>と<家>に関する覚書」
	1972年	第79号(2月20日)	小川徹 「百姓門中における清明祭受容の一事例 - 『家風祭典』の紹介 -」 桜井徳太郎 「『ツカサ崩れ』とユタマンチャー - 琉球巫俗の一つの問題 -」 鶴藤鹿忠 「琉球地方における二棟造り」
		第83号(9月10日)	水野悦子 「沖縄離島における祭祀組織の展開 - 来間島を中心として -」
	1975年	第98号(4月30日)	藤原覚一 「八重山のサバニ」